

## “持続可能な社会を目指すスウェーデン市民と出会う旅”に参加して思ったこと

新藤 絹代

鎌仲ひとみ監督の映画『みつばちの羽音と、地球の回転』で日本に紹介されたスウェーデンの電力事情。一度現地を見たいと思っていたが、寒いのはいやだ、日も短いしと最初は正直この季節はごめんだと思っていた。スウェーデンの人々が寒い季節をどう暮らすかを見ることで、本当のスウェーデンの人々の暮らしがわかるとの一言に「なるほど、そういう考えもある」と今回のツアーに参加する決心をした。心配した寒さは、実際に行ってみると北海道やスキー場に行っていたことを思うと、同じようなものだったので一安心した。

今回の旅は、観光旅行とはまったく違い、そこに暮らす人々に会え、話が聞けるのがたのしみだが、ウプサラで環境党（緑の党）の青年達と話し合え、ウーメオではあの有名なトリビヨンさんのエコロジカルな生活を実際に見せていただき環境自治体を作るバックキャスティングの話が聞けたこと。環境教育のバルプロさんの自宅でウーメオに暮らす人々と食事をご一緒するという貴重な体験もした。また小学校やシュターナー学校で子ども達と一緒に給食というのも思い出に残る経験だった。1週間という短い時間だったが、スウェーデンの人々の英知に、いまだに感心する毎日で、ウーメオの地元紙に「この旅行の成果は」とインタビューされたときにも同じように応えた。この20年間 日本は何をしてきたのだろうと、失われた10年とか20年という言葉が浮かんだ。

特に感心したのが次のシステムだった。

- 1、 生ごみを資源として車を動かし、また熱源にするシステムに行政が取り組んでいる。

ウプサラ市のバイオバス工場は2006年から稼動して今では市内のバスの半数近くがバイオガスで走っている。

日本ではいまだ焼却炉をどうするかの問題で、生ごみはやっかいなものでしかない。(帰国後長年ごみ問題に取り組む仲間に話したら「知っているよ」といわれた、知っているなら東京もそうしようと言ってよ、と思わず反論してしまった。私が無知なだけなのに)

- 2、 風力発電などエネルギーを選べ、地産地消、電気会社を自由に選べるシステムを作ってきた。

今回の震災で停電になったとき、近くに風力発電設備があってもその電気を地元の人が使えなかった。日本の電力会社がいまだに地域電力を独占していることに原因がある。

スウェーデンも以前は国営の電力会社が独占していたが、1996年に国営電力会社の反対を押し切り電力会社を選べるようになり、自由競争が導入された。そのため地域の電力会社（協同組合方式もある）で発電方法による電力を選ぶことが出来る。

- 3、 核燃料廃棄物の最終処分を考えると候補地がほぼきまっている。

12基の原発がある原発大国スウェーデン。1980年国民投票で長期的に原発を廃棄することに決めた、2基がデンマークの反対でとまっているが廃止期限の2010年を過ぎても10基が稼動している。原発から出る核廃棄物を最終処分することに決め、20年前から国内の地盤調査をして、ストックホルムから100キロ、ウプサラから40キロのエストハイマーにほぼ決められ、自治体と話し合いながらすすめていることを知った。地盤の強い海底の岩盤のなかに埋める計画だ。原発を稼動することで出来てしまった核燃料廃棄物をどうするのか日本よりは考えているし、地震のない国であることもうらやましく感じた。

- 4、 10代から政治に関心のある人たちは政治組織に属している。

ウプサラ大学に留学されている小串さんの論文で、各政党に若い人向けの組織があり10代から政治活動に参加する人がかなりいることを知った。選挙権・被選挙権は18歳から。ということは議員にも10代の人がいる。個人名で投票せず、政党名で投票する。比例名簿には若い人の名前も意識的に上位にいれ関心を持たせる。など日本とはずいぶん選挙制度も違うことも知った。そして高校の授業として模擬投票をすることも驚きだった。

今回会った、環境党、シュタイナー学校の若者達は生き生きして自分の考えをしっかりと話すことに好感が持てた。

5、そしてこれらのことを可能にする教育や政治などの社会システム。

雪の中での5～6歳児の自然体験教育。中学生たち野外自然学校、シュタイナー学校では私たちゲストを迎えての授業など体験した。小さなときから経験を重んじる、自分の意見をハッキリ伝える、そして責任をしっかりとることが重んじられていると感じた。細かいことは聞くことができなかつたが塾とか、受験とかあるのだろうか、なさそうだ。自分で考え、議論して答えを導き出す。正解はないという教育なのではないかと感じた。環境に対する感性も、民主主義による政治システムもこのような教育から生まれるのではないか。選挙の投票率が高く、政治家は尊敬されているのも感じた。税金も高いが高度な福祉が約束されていて、それだけ政治に対する信頼が高いといえる。また政治家はほとんどが職業ではなくボランティアでみんなの意見を反映させることに使命感を持っているなど、官僚主導政治といわれる日本とはかなり様子が異なるのだろう。日本のように育児も、教育も、医療も、老後も自己責任、いまだ原発にかかるコストがいくらなのか、電気料金の算出方法もどこまで情報公開されているのかわからない状況で税金値上げを言われても・・・というのが国民の正直なところではないか、残念ながら国に対する信頼が持てないのが日本ではないか、それともお上に任せしておけばという人が多いのが原因でしょうか？

子どもは塾通い、大人は教育費や老後資金のためせつせと残業して働く、政策を話すより、名前を連呼し握手をどれだけするかで決まる選挙など、日本人はずいぶん無駄なエネルギーと時間を日常生活に使っている気がするし、本当の豊かさってなんだろうかと今回の旅では改めて考えさせられた。

今回の旅行であったスウェーデンの人たちはゆったり生活を楽しんでいるように思われました。わずか1週間の旅行者にわかることではないでしょうが、整った育児環境で、男女ともに働くのが当たり前でしかも生活にゆとりがありそう。仕事が終わればさっさと家に帰る一方、フィーカ（コーヒータム）しながら一人ひとりがじっくり考え議論し、結論を出し、その結論に責任を持つ仕組みと訓練が幼いときからの教育で出来ているようにおもい、スウェーデンは真に豊かな国だと感じた。

最後に、日本が豊かさを感じる国になるにはどうしたらよいのか、出来ることから気づいた人が少しづつでも参考変えていくよりないと思う。

脱原発は、スウェーデンも国民投票で決めたものの実現できていないのが現状だが、それでも原発や化石燃料にかわる自然エネルギーの割合が10パーセント以上に増えている。脱原発を言うことと同じように自然エネルギーを少しづつ増やしていくことが大切だと改めておもった。私は10年前から自然エネルギー市民発電所を増やすNPOを運営しているが、今後もっと

発電所を増やしていけるよう努力し、同じように考える仲間をふやしたい。もっと知恵や技術のある人や機関が自然エネルギーの研究に取り組めば日本の現状にあった、風力・太陽光だけではない効率のよいシステムも出来、飛躍的に普及できるのではとおもう。そして原発が良いと思う人は原発の電気を、自然エネルギーが良い人はその電気をスウェーデンのように選べるようになることがまず大事だ。事故が起これば責任も選んだ人たちが取る。とことん討論してきめ、決めたことには責任をもってすすめることで世の中が変わるのではないか、スウェーデンがそのモデルを示していると思わせてくれた旅だった。

最後になりますが、現地でコーディネートしてくださった持続可能なスウェーデン協会のレーナ・リンダルさん、そして現地に暮らす日本人の方々、多くの皆様のネットワークのおかげで、この旅行がより深くスウェーデンを理解できる貴重なものになったこと感謝します。

企画して下さったリポーンの壱岐さん、気持ちよいたびをご一緒できた参加者の皆さんにも感謝いたします。皆さんありがとう。

#### 参考にした資料

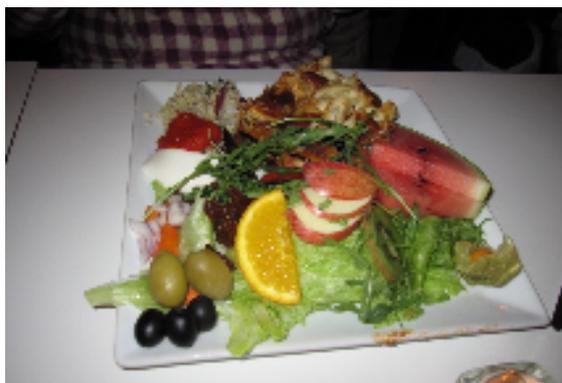
- 1、 スウェーデンの持続可能なまちづくり (サラ・ジェームス&トルビョーン・ラーティ)  
新評論 2006年
- 2、 小串聡彦氏 (ウプサラ大学大学院) のスウェーデンの民主主義と若者に関する論文



**バルフロさん宅の夕食の一部**



**小学校の給食**



**彩がきれいなスウェーデンの食べ物 いろいろ**